

ドン・キホーテの消息



## 探偵 I

その電話がかかってきたとき、わたしはソファーでうたた寝をしていた。わずかな間に雪原を歩く夢を見た。広がっているのは、目路のかぎり続く雪景色だった。人も街も、森も山もない。純粹に真っ白な世界。そのなかを、わたしは一人で歩いている。辺りには物音ひとつない。雪はしんしんと降り続けている。頭上には鈍色の雲が低く重くたなびく。

とめどなく降りしきる雪は、徐々にその嵩を増していく。足元を埋め尽くす雪の塊。わたしの足は痺れはじめる。身体は重く、ひと足ごとに地面に飲み込まれそうになる。いっそのまま倒れ伏し、埋もれてしまいたい。何度もそう思った。でもそうはいかない。少しでも前に進まなければ。由来の知れない熱っぽい思いが、わたしの内部を貫いていた。

似たような夢は、何度か見たことがある。細部こそ違え、だいたい似たような設定、同じような情景が続く。継ぎ目のない、ひと連なりの夢。たぶんなんらかの願望を反映している。わたしはいつも、ここではないどこかに行きたいと願っていた。でもどこかとは、どこのことか。欲望は具体的な宛先を欠いている。

事務所の壁にはもう何年も前から、雪原の写真が貼りつけてある。いつだったかギャラリーで買い求めたものだ。色のないその風景はよく、とりとめのない夢想到わたしを誘った。わたしはただ、なるたけ遠くに行きたかっただけかもしれない。人間の痕跡が及ばない場所まで。しかしわたしは、自分がけっして出発しないことも知っていた。

電話のベルが、すでに浅くなりかけた眠りを破った。わたしはソファから身を起し、おもむろに受話器を手取る。するとだしぬけに女が言った。

「お願いしたい、ことがあります」

独特にこぼった声だった。低く静かで、とらえどころがない。年齢さえ推し量れなかった。ともすると、性別の判断さえあやしくなってくる。そんな声だった。

他方わたしは、まだ半分夢のなかにおいて、うわごと謔言のようになにか呟いた。「ミモザはマメ科の一種です」とか「デザートは別料金です」とか、そんな意味不明なことを口走ったかもしれない。なぜなら女は電話口の向こうで、じっと黙り込んでしまったからだ。

しばらくのあいだ、じっと考えを巡らせるような沈黙があった。それから再び、声が聞こえてきた。「やはり。あなたに電話して正解でした」。どこがどう正解なのか。わたしは気を取り直して訊いてみた。「わたしのことは、誰からお聞きに？」

「さる、信頼できる筋の方から。しかし、詳しくは言えません。その方に迷惑がかかるといけな  
いので」

「なるほど。知らぬ間に、わたしもずいぶんと重要人物になったようだ。次の選挙に打って出るべき時期かもしれない」

彼女はわたしの言葉を無視した。

「明朝九時に、迎えをやりませう。必ずこちらに来てください。どうか」

「仕事ですね？」とわたしは訊いた。

「そう。仕事です」と女は言った。そして一方的に通話は切れた。

わずか一分にも満たない会話だった。あまり現実味がない。わたしは受話器を握りしめたまま、なにか別のことが起こるのを待った。しかしなにも起こらなかった。そのままの姿勢でいると大きな欠伸がこみあげてきた。午後のやわらかな光が、ゆっくりと部屋を満たしていった。

わたしはキッチンに行って湯を沸かし、コーヒーを淹れた。ふた口も啜ると、頭はだいぶんはつきりしてきた。わたしはひとまずこう考えた。さっきのは夢の続きで、ほんとうは電話などなかったのかもしれない。それから次にこう考えた。あるいは電話自体はほんとうなのだが、いたずら電話だったかもしれない。あるいは単に、間違い電話だったのかもしれない。これがいちばん、妥当な解答に思えた。いずれにせよ、わたしにはかかわりあいのないことだ。

しかし、とわたしは思い直した。彼女は仕事だと言っていた、わたしの問いかけに対し、はっきりそう答えたではないかと。たしかにそれは、ありそうなことだ。わたしは探偵である。そしてここは古びた雑居ビルの二階にある探偵事務所だ。依頼の電話がかかってくるというのは自然

な流れだろう。ならば事態を甘んじて受け入れ、仕事として引き受けていくのが筋というものだ。ただ問題は、それがどんな種類の仕事かということだ。

弁護士に得意の専門分野があるように、探偵にだって専門がある。離婚訴訟を手掛ける弁護士、素行調査を請け負う探偵——すべては顧客のニーズに合わせて展開される。われわれの生きている社会は、複雑に枝分かれして、迷路のように入り組んでいる。こうした分業化の流れはもはや避けられない。そしてわたしの専門といえ、迷子のペットを探すことだ。行方不明の動物を見つけ、飼い主の元に届けてやること。それがわたしの仕事だ。

残念なことに、わたしの仕事に対する世評は、決して高いものとは言えない。組合のなかでも一段低く見られているのが現状だ。ただでさえ探偵の小粒化、その意義の縮小が危ぶまれている時代だ。失踪人の捜索であれば、まだしも劇的展開が望めるかもしれない。社会派の文脈を踏まえる必要がある。哲学的視座も開けそう。あるいはそこに、情緒的な趣を添えることだって不可能ではない。が、それもすべては、相手が人間であればこそその話だ。

それがよりもよって動物！ しかも迷子のペットが専門とは！——ひそひそと陰口を言う連中は後を絶たなかったし、面と向かって批判を浴びせる同業者もいた。

しかしわたしは、この仕事が好きだった。誇りは持てないにしても、やりがいがあった。なによりわたしは、動物を追いかけるのが好きだった。行方不明のペットを探して街路をたどると、わたしは一種の放心状態に陥る。尾行・追跡のコツは、相手と自分が一体になることだ。相手が

見、考えるように、自分もまた見て考えること。これは探偵術の基礎中の基礎だ。ただその対象が動物である場合、いくぶん特殊な様相を帯びることになる。

追跡の最中、わたしは一個の動物になる。ひとたび動物の視点になると、街はいつもと違って見える。それはまったく別物と言っている。なにげない壁の隙間や路地や屋上、無人の空き地や建設現場——ふだん見落としていたそうした空間が、突如重要な意味を帯び、浮上してくるのだ。それはさながら、もう一つ別の、隠された街を見出すような感覚だった。

動物たちは街のそこそこに、各々のなわばりを構え、固有のパターンを持ち棲息している。わたしはその生態を注意深く観察し、間隙を縫って進む。そしてわずかなほころびを見出す。飼いの元を離れたペットは、街路にあっては新参者だ。行く先々でへまをやらかし、粗相をしでかす。その不行状の跡をたどって、追いかける。丹念にたどっていけば、必ずその足取りはつかめる。わたしはその手ごたえが好きだ。

わたしはハンターになるべきだったのかもしれない。ときどきはそう思う。我を忘れて獲物を追うとき、最高度に幸せになれるのだから。色のない雪原を見て、改めてそう考える。最果ての地で獣を狩り、その皮を剥ぎ肉を食らい、内臓と血を啜るだけの毎日——。そう少しでも早く、わたしは街から出ていくべきなのだ。遠くに赴きたいのであれば。だがとりあえず、明日の九時までには待つことにしよう。迎えとやらが、はたして来るのか。それを見定めてからでも遅くはないはずだ。

翌朝、わたしはいつになく早く目を覚ました。窓の外はまだ暗かった。

二度寝をしようと試みたが、目が冴えてうまく眠れなかった。しかたなく起きてコーヒを飲み、トーストを食べ、洗い物を済ませてからシャワーを浴びた。入念に髪を洗って、髭を剃った。バスルームを出ると下着を着け、ワイシャツを着てネクタイを締めた。ネクタイをしたのは久しぶりだった。いつ以来だろうと考えてみたが、思い出せなかった。そしてクローゼットの奥から、グレーのスーツを引っ張り出して着た。

姿見に映してみると悪くはなかった。ほどほどに有能な会計士。たぶんそれくらいの役どころ。バランスシートの帳尻が合えば、世界は順当に回っていくはず。そう信じて疑わぬ人種だ。少なくとも、路地裏を這いずり回って、犬猫を探す人間には見えない。悪くない。まったくもって悪くない。もっともそんな装いが、なんの役に立つのかはわからない。すっかり出かける準備はできたが、ほんとうに出かけるのかどうかはわからないのだ。

ポストを見ると、新聞が届いていたのでソファに腰掛けて読んだ。増税があり、選挙があり、事故があり、収賄があった。失言があり、暴動があり、訴訟があり、災害があった。すみずみまで丹念に読んだが、とくに興味をひく記事はなかった。もちろんそれは、新聞のせいではない。まして世の中のせいでもなかった。わたしの興味および活動の範囲が、きわめて限定された地点にしか及ばないせいだ。



いや。もしもわたしがすぐれた探偵であれば、一見ありふれた記事の背後に、秘密の秩序を見出して言うのかもしれない。ワトソンくん見給え、ここにおもしろい記事が載っているよ、と。ささやかな啓示を求めて二度目の精読に取りかかったときだ。重い足取りが階段を上ってくる音が聞こえた。ほどなく玄関のベルが鳴った。時計を見ると、九時ちょうどだった。どうやら時間には正確な相手のようだ。

「お迎えにまいりました」と低い声があった。男はおそろしいほど背が高かった。扉を開けても、すぐには頭部が見えなかった。天井から吊り下げられている非常灯の脇に、俯いた表情が見えた。背が高いだけではなく、体格も立派だった。きちんとした黒のスーツを纏っていたから、正確にはわからない。だが服の上からでも、相当な筋肉の膨らみが見て取れた。首の太さなんて、女性の腰回りほどありそうだった。

わたしはほとんど圧倒されて、うながされるままに事務所を出た。すると表には、これまた巨大なストレッチリムジンが停まっていた。車体はボンネットからトランクまですべて真っさらな白で、一片の染みも汚れも見当たらなかった。朝の路上に横たわるそれは、砂浜に打ち上げられた鯨を思わせた。

男はすみやかにドアを開け、わたしが座席に着くのを見届けてから、静かに閉めた。そして巨体に似合わぬ速度で身を翻し、運転席に乗り込んだ。すべてがあまりになめらかに、自然な動作でなされていたから、口を差し挟む余地がなかった。

気がついたとき、車はもう動きはじめていた。窓の外を、景色がゆるやかに流れていった。思えばこれが、誘拐劇的一幕であっても不思議はなかった。だがもし仮にそうだとしても、わたしは不平を言わなかっただろう。手際の良い職人仕事に、水を差すような野暮を嫌って。

「三十分ほどで着きます」運転手がやはり低い声で言った。「なにかお飲物でも？」

「いや、大丈夫」とわたしは答えた。

車は滑るように進んだ。車体の揺れはおどろくほど少なく、ほとんど動いていないかのようだしばらく走ったところで間仕切りが上がり、座席と運転席が分断された。そうしてわたしは、暫定的な密室に閉じ込められた。

もっともそれは、ずいぶん優雅な密室だった。後部座席はそれだけで、小ぢんまりしたリヴィングほどの広さがあった。天鵞絨張りの室内は温かく、カーペットは柔らかかった。聞き取れぬほどの小さな音で、音楽が流れていた。どこかで聞いたような旋律だったが、曲名が思い出せない。それはあまりにも遠い記憶に結びついているような気がした。もしかしたら、わたしが生まれるよりも前の時間に。

それからわたしは、魚の腹のなかで生きる男のことを思い出した。

神の言いつけに叛いたヨナは、海を漂い、巨大な魚に飲みこまれてしまう。そしてその腹のなかで、三日三晩を過ごすことになる。生かすも殺すも、すべては神の思惑次第というわけだ。内臓の牢獄に閉じ込められた孤独。だがそれは同時に、奇妙なやすらぎに満ちた光景ではなかった。

か。暗闇のなかに蹲うづまる男。自分自身と現実の間を、分厚い脂肪の壁で隔てられて。

そう。この《腹》というのは、どこか母胎を思わせもする。事実、ヨナはこの試練を経て《生まれ変わった》のではなかっただろうか。だがヨナはそれからどうなったのだろうか。思い出せない。しばらく記憶を探ってみたが無駄だった。

気がついたとき、車はもう停まっていた。動きはじめたときと同じように、いつの間にか。間仕切りが下がり、運転手が到着を告げた。ドアが開いて、陽射しが直に差し込んできた。眩しかった。

わたしはそそくさと車を降りて、涙に滲んだ目で周囲を見渡した。目の前には、青いガラス張りの巨大なビルディングがあった。午前早々の陽射しを反射し、まばゆくきらきら輝いている。足元から見上げるかたちで、天辺まで見渡すことはできなかったけれど。

わたしはしばらくその場に立ち尽くしていた。

「よろしいですか？」と背後から運転手が言った。「上で主人が待っております」

最上階のさらにその上、屋上に設えられたベントハウスだった。テニスコートふたつ分ほどの広さがある。天井はやけに高く、壁面はほぼガラスから成る。惜しみなく降り注ぐ陽が、フロアすべてを輝かせていた。窓辺には、鉢植えたちが所狭しと並び、ふんだんな陽射しを浴びて繁茂している。その様子だけ見ていると、温室のなかに迷い込んだような気分になった。

それに比べると、人の空間はそっけない。中央にマホガニー材の大きな円卓。それを取り囲む椅子が十三脚。たったそれだけ。そして円卓の向かい側には、依頼人がいる。どうしてか、ひと目見ただけでわかった。彼女こそ、わたしの依頼人に違いないのだと。

年はまだ若い。せいぜい二十代後半といったところか。頬にまだ少し幼さが残っている。小柄で、少しふっくらした体つき。白いブラウスに紺色のスカート。灰色の上着の襟に、銀のブローチが光った。髪は黒々として、まっすぐで短い。白い肌と、際立った対照を成す。化粧気はほとんどなく、ルーージュもごく控えめなものだった。そのせいか、目元の印象ばかり強く刻まれた。鋭い二重瞼の奥から、冷ややかで澄んだ瞳がこちらを見ていた。ただ両方の目の焦点が、少しだけぶれている。斜視というほどではない。けれど各々の目が、違う意志を宿しているような、そんな不思議な感覚があった。

わたしたちは、しばらく互いに見つめ合っていた。再会した恋人たちがそうするように。不可解な沈黙が周囲を包んだ。スローモーションで時は流れた。

彼女はわたしを値踏みしているのかもしれない。ただその視線は、離散的でまとまりを欠いていた。くわしく観察するというのではなかったし、心を見透かすというのでもなかった。ただ単に、わたしという物体の表面を見ていた。

ずいぶんたってからようやく、彼女はゆっくり口を開いた。

「わたしはこれから、あなたに対し、できるだけ率直に語ろうと考えています。そのためあなた

には、約束してもらわなければなりません。秘密を守るといふ約束を」電話で聞いたときと同じ、とらえどころのない声だった。すぐ近くなのに、ずいぶん遠くから話しかけられているような気がする。

「それはもちろん」とわたしは答えた。「守秘義務は、われわれの職業倫理の根本です。ご安心いただければと思います」

「ですが、ひとことに秘密と言っても、そこにはいくつかの形態があります。たとえば、こうです。王様の耳がロバの耳であっても、それはあくまで王の私的秘事項に過ぎません。床屋がどこでそれを叫ぼうと、われわれが関知することではない。しかしもし、王様が服を着ておらず、裸だったとしたらどうか。話はぜんぜん違ってきます。それはつまり、公然の秘密なわけです。誰もがそれを知っていながら、指摘することを避けてきた秘密。それを媒介にすることで、世界が成り立っているような、そんな秘密です。この場合、秘密は王個人に属するのではなく、王を取り巻く家臣や国民、ひいては国家全体に属しています。つまり秘密を知ることが同時に、それに加担することを意味している」

「つまりあなたは」とわたしは応じた。「わたしにも、同様の加担を求めているわけですね。単に知りえた事柄を話さない、といった消極的な態度ではなく――」

「そうですね。ありていに言えば、そういうことです」

「仕事とあらば、それもやぶさかではありません。しかし詳しくお話をうかがう前に、解決しな

ければならない問題があります」

「問題が、なにか？」

「ええ。そもその出発点が問題なのです。つまりわたしの仕事の専門性という点が。もし誤解があつて、それが解かれぬまま話が進むと、お互いに引き返すことができなくなってしまいます。そうした事態は避けたいと思います」

「あなたのプロフィールのことを言っているのであれば、それはまったく問題ありません。

あなたはペット探しを専門に請け負う探偵業者です。そうです。そのことはよく承知しています。わたしたちは無駄を嫌います。だから事前に、あなたについても、さまざまな調査を行っています。たいていのことは知っていますよ」

「たいていのこと、ですか？」

「年齢は三十六歳。血液型はA B型。星座はやぎ座。身長は一八五センチ。学生時代は、ボクシングをやっていた。そのときの怪我で、右耳の付け根に傷跡が残っている。二十七歳のとき結婚。四年後に死別。子供はいない。いまは、事務所を兼ねたビルの一室に一人暮らし。現在、特定の女性関係はなし。ときどき金を払って女と寝ている。煙草は吸わない。アルコールは、ウィスキーを週に二、三本空けるほどの量。夕方から飲み始め、明け方まで深酒することもある。食事はたいてい近所のレストランで済みます。自炊はしない。趣味はとくにない。日課はジョギング。休日、映画を見るか、ジムのプールに行つて黙々と泳ぐ——」

「なるほど。わかりました。もう十分だ。十分です。たいしたものだ。でもそれだけの調査力があるなら、わたしなど雇わなくても、問題を解決できるのではないですか」

「そうできるのなら、とくにそうしているところですよ。でも事態は、そう簡単には動かない。われわれとしても、打つ手を失くしている、というのが現状なのです。ここはひとつ、あなたの探偵としての特殊性に賭けてみるしかない。そうした思いから今日、あなたに来てもらったわけです」

「わかりました。こうやって話していても、埒が明きませんね。そろそろ本題に入るとしましう。いったいどういったご依頼なのでしょううか？」

そこでまた彼女はじっと口をつぐんで、静かにこちらの様子をうかがう。ほころびかけていた蕾が、再び身を縮めてしまったかのように。周囲の温度が急に下がった気がして、わたしは思わず身震いをした。しかしそれは錯覚だった。陽射しはやさしくわたしたちを包んだままだった。

わたしは辛抱強く待った。やがて彼女は、再び喋りはじめた。

「人を、探してもらいたいのです。もちろんこれが、あなたの専門から外れる仕事であることは承知しています。しかし目下の状況を考えると、わたしたちは違った方途を取らざるをえない」

「ちょっと待ってください」わたしは遮って言った。「そちらの都合で勝手に話を進められても困ります。わたしには人探しなんてできませんよ」

「いいえ。これは通常の人探しではありません。あなたに探してもらいたいのは、人以上のもの

かもしれず、人以下のものかもしれない」

「よく意味がわかりませんが——」

「叔父が姿を消してから、もう三か月になります。その間、わたしたちも八方手を尽くしてきたのです。それなのに、一向に成果が出ません。どうしてでしょうか。さきほどあなたが指摘されたように、われわれの調査部もけっして無能ではありません。それが、行方不明の老人を一人、見つけることができないというのは、いったいどういうことなのか」

どう応えていいかわからなかったので、わたしは黙っていた。彼女は軽く咳払いをしてから続けた。

「以下話すことは、くれぐれも他言無用に願います。——叔父は現在、重度の脳腫瘍を患っています。もはや余命幾ばくもない状況なのです。むしろ生きてるのが不思議と言ってもいい。施設の職員によると、記憶喪失に幻聴、幻覚、失見当識といった症状にも見舞われていたようです。そんななか、起こったのが今回の失踪騒ぎです。叔父は忽然と姿を消しました。煙のように。その後の足取りは杳やうとして知れない。通常では考えられないことです。そんな状態の老人が一人、追跡を逃れ、さまよっているなどということは。しかし認めざるを得ません。これが、わたしたちの置かれた現状なのです。手がかりもつかめないうまま、いたずらに時だけが経過しています。そこでわたしたちは、もう少し違ったアプローチを試みることにしました。そのために選ばれたのが、つまりはあなただったわけです」



「繰り返しますが、勝手に話を進めないでいただきたい。われわれの認識は、どうも根底からずれ違っているようだ。わたしは動物が専門の探偵です。そのわたしに失踪人の捜索を頼むというのは、重病人の手術を獣医に託すことに等しい。あなたが言っているのは、そういうことですよ」

「動物と人間の違いは、それほど本質的なものではないかもしれませんが。とくに群れに紛れた一人を見つけようとする場合には。エドガー・ポーの作品に、ありませんでしたか。探偵が見出した犯人がじつはチンパンジーだった、というお話が」

「チンパンジーではありません」と、わたしは訂正した。「オランウータンです。——あれは史上初の推理小説と言っているいい作品です。複数の証人が、類人猿の声を外国語だと聞き違えていたそこに解決のポイントがあった」

「なるほど。つまり探偵の知恵は、その起源において、人と動物の境界線上にあったと。そういうことになりませんか」

「たしかに。そう表現するならばそうかもしれません。探偵的な知のありようは、都市の誕生とともに生まれたといえます。孤立した個が寄り集い、暮らしているのが都市という場所です。そこでは誰もが互いに他人で、希薄な関係を生きざるを得ない。そうした状況下で犯罪が起こる。

容疑者は無数だ。なぜなら都市では、人びとは圧倒的に匿名で顔を持たず、置き換え可能な単位に過ぎない。いったい誰が、どんな動機でこんな事件を？ この問いに答えを出すべく、登場す

るのが探偵なのです」

「そしてその方法は、通常の意味での人間性を括弧に入れることから始まる」

「そうですね、まあ。探偵は顔のない群衆のなから、特定の犯人像を、その相貌を浮上させなければなりません。無限に近い可能性を吟味し、不可能な選択肢を一つずつ除外していく。そのためには人間を数量的・統計的に把握すること、早い話が群れとして扱うことが必要になってきます。人と動物の境界はたしかに、いったんは取り払われるべきです」

「やはり、あなたに来てもらったのは正解でした。わたしたちが求めているのも、まさにそうした視点なのです」

「しかしわれわれはいま、文学や社会学の話をしているわけではありません。現実の話をしているのです。この件にかんして、わたしが関与する余地があるようには思えない」

「あなたはただ、無心に調査をしてくればいいのです。いままでのような方法ではなく、別な視角からこの事件をとらえなおすこと。それがわたしたちの目的ですから。その成果をどう用いるか。それはこちらの問題です。あなたが気を揉む問題ではない。なおも現実的な話がお好みというなら、こういうものもあります」

そう言うと、彼女は円卓の引戸から小切手を取り出し、慣れた手つきでペンを走らせた。一枚を切り離して、わたしに手渡す。記された金額は、事務所の年商に匹敵していた。わたしは狼狽を表に出さぬよう苦労した。

「とりあえず、当座に必要な費用として渡しておきます。不足ならば言ってください。成功報酬は、これの倍額を支払う、ということでしょうか。悪い話ではないはずですね。事務所の賃料もだいぶ滞っているようですから」

だいぶ躊躇<sup>ためら</sup>った末に、わたしは小切手をポケットに収めた。顔が火照ってくるのがわかった。しかし背に腹は代えられなかった。金は天下の回りものというが、自分の手元にやってくる機会は、そうめったにあるものではない。

「報告は、まめに入れてください」と彼女は言った。「わたしから、話すことは以上です。なにか、質問はありますか？」

訊くべきことは山ほどあったが、どこからどう尋ねればいいのかわからなかった。だからわたしは立ち尽くしていた。すると彼女は、不意に距離を詰めて、わたしの目の前までやってきた。強い花の香りがした。

「叔父は、人間が嫌いでした」わたしの目をじっと見据えて彼女は言った。「彼の人生は大半、富を蓄え、さらに増やすことに費やされました。が、それは強欲だったからではありません。そうする他に、この世界と向き合う方法を知らなかったからです。叔父は人の暖かみを知らず、魂の深みを知りませんでした。その代わり、資本と投機の遊戯のなかに、仲買と空売りの王国のなかに、自らの居場所を見出したのです。ある意味で、叔父は不在の人間でした。そこに居ながら居ない人間。一種の透明人間なのでした。より正確に言うなら、彼は人間が嫌いだったのであ

りません。興味がなかっただけです。必要としていなかったのです。信頼や友情、愛を感じる相手を求めず、大勢のなかにいても、いつも一人でした。わたしはそのことをよく知っています。表現の仕方はまるで違いますが、あなたからも、同じ匂いを感じます。あなたもまた、他人を必要としていない。だから動物を追うことに、血道をあげているのではないのですか。そんなところは、叔父によく似ています。きっとよい成果が得られることでしょう。期待しています——」

エレベーターを降りると、運転手は来たときと同じ姿勢で待っていた。まさかずっと待っていたのだろうか。しかしわたしの頭脳はすっかり麻痺していて、余計なことを考える余裕がなかった。無言のまま、例の化物じみたリムジンに乗ると、そのまま後部座席に身を投げ出した。

車は来たときと同様、ごくスムーズに走り出した。街路の景色が戻ってくると、ほっとしたのか急に眠気がやってきた。わたしはうつらうつらしながら、鯨に飲まれたヨナは、それからどうなったのだろうか、また考え出した。

いつしかわたしは眠っていた。そして夢のなかで、憐れなヨナになっていた。

魚の腹で三日三晩を過ごした後、ようやく吐き出されたわたしは、すっかり憔悴しきっていた。もはや神の言いつけに叛くだけの気力は残されていない。だから指示通り、ニネヴェに向かった。人びとに悔悛を勧めるために。

わたしはほとんど死ぬつもりだった。ニネヴェは敵国の町だ。そこで神への恭順を説くなど、

命知らずにも程がある。しかしわたしが、神の怒りのほどを語ると、彼らはあるさきそれを受け入れ、頭を垂れて悔い改めるのだった。それを見て、神はニネヴェを滅ぼすのをやめた。

わたしは複雑な思いを抱いていた。なるほどわたしは命拾いをした。しかしニネヴェの人びとが、こんなにも簡単に心を翻すのであれば、そもそも自分が赴く必要などなかったのではないか。神の処遇に納得がいかなかったわたしは、庵を編んで、ニネヴェがこれからどうなるのか見守ろうと思った。すると庵のそばに、トウゴマの樹が生えて日陰ができた。わたしはこれを見て喜んだ。だがすぐに神が虫を送り、樹を枯らせてしまった。わたしは怒って神に訴えた。すると神は答えて言った。おまえがトウゴマ一本を惜しんだように、わたしはニネヴェの民の命を惜しんだのだ、と。

だがそれはどうだろう。わたしは釈然としない思いを抱え、神への反論を試みるのだったが、うまく言葉が出てこない。わたしはいつでもそうだった。なにか肝心なことを言おうとすると、言葉がひとつも浮かんでこない。頭が真っ白になってしまう。そうして結局、誰かの言いなりになってしまうのだ。

背中にゆるやかな振動を感じた。車はひたむきに、わたしを運んでいるようだった。